

# 針葉樹会報

第93号  
2001年3月



## 目次

遺文『雲烟萬里』	冠木伊右衛門	2
カトマンズ便り(2)	横山 皖一	4
小樽の堀岡さんを訪ねて	山本健一郎	8
毎日が日曜日	宇田川徳治	8
ぐうたら登山紀行	大 建二郎	10
「日本百名山」全山登頂に思う	高橋 信成	12
中国の名山 黄山の旅	長澤 道彦	17
■懇親山行報告(倉知・西牟田)		
有明山探訪		20
中村慎一郎君レリーフ訪問		21
懇親山行を考える		22
■本をめぐって		
『深い浸食の谷』	山本健一郎	23
『追悼中島寛・天地ある限り』	倉知 敬	23
『エリック・シプトン』	佐藤 之敏	25
シプトンの評伝にまつわる思い出		
	藤本 敏行	26
会報の活性化のために	田形 祐樹	27
編集後記		28

表紙写真Ⅱ 中国の黄山／長澤道彦

発行日 2001年3月31日

発行者 針葉樹会

印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報  
第93号

編集人 佐薙 恭

〒240-0066

横浜市保土ヶ谷区釜台町 5-4-806

会報幹事

佐薙 恭、井草長雄、大谷公重

## 遺文 『雲烟萬里』

冠木 伊右衛門（昭4）

※冠木さんは二〇〇〇年十一月十七日、永眠されました。享年九五歳でした。以下は『雲烟萬里』と題した冠木さんのご本から、ほんのさわりを抜粋したものです。スケッチも冠木さんの筆になるものです。

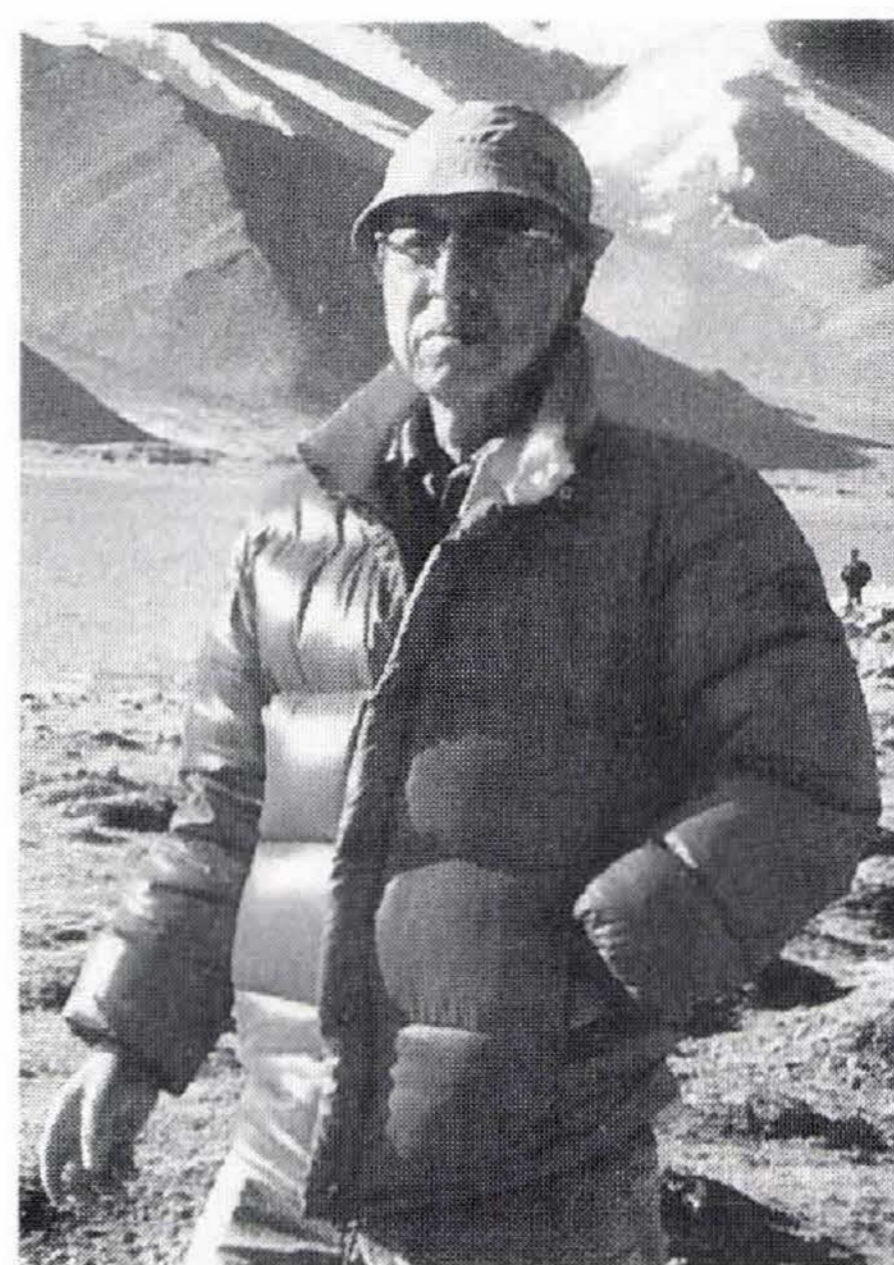
### 「イワシの缶詰」

昔、飯豊山から下りて麓の民家に泊まった。目の前を、子供がイワナを二匹ぶら下げて通った。ところが、我々は夕食にイワシの缶詰を食わされた。

なる程、その村ではイワナは只で、イワシの缶詰には金がかかっている。併しあのイワナを食いたかった。

### 「ヌカ屋」

或る時、一人で日本アルプスに登った。いつもと違う道を下って見た。日はとつぷりと



暮れてしまい、小さなお堂があったのでその中に入って寝た。夜中小便に起きた。すると一人の女が一本歯の足駄を履き、頭にローソクを三本立てて歩いて来たが一本の大木の前に立つと、モグサを出し、その大木の窪みに入れ線香で火を付けた。

不思議に思っただけで聞いてみると、或る男に騙されたのでその恨みをはらすのだと云う。

「祟り針と云うことは聞いていたが、なぜモグサに線香なのか」と尋ねたら曰く

「その男は糠屋です」  
なるほど「ヌカに釘」では効かない訳だ。

### 「九死に一生」

日中戦争の時だった。我々は中支の谷底に居た。或る夜、トントンと銃音がして両方の山上から襲撃を受けた。隊長以下、兵隊は皆出て応戦している。私は一人、民家の中で金

櫃（金庫）に腰を掛けじつとしていた。もし、敵が攻め込んで来た時には、この民家に火をつけて金櫃を焼き、私は拳銃で自害せよとの命令だ。自分が戦って居るならそれに夢中になれるが、今か今かと自害の時を待つて居る時の気持ちはとても言葉に言い表せなかった。幸いにも敵は去って、全く九死に一生を得た。

次の日、我々は谷を渡り峠に出た。ところが、そこに柿の木があり実がなつて居た。桑の木もあった。兵隊は柿の実を取り、これに桑の葉を入れて煮た。渋が抜けて甘くなった。之を食い、遥か会津の秋を思った。

### 「トカゲ」

終戦でジャングルに追い込まれた時だった。或る時、ゴム林の中に移った。木の上を見ると長さ二メートル位のトカゲが居た。皆で木の枝を投げ付けて落とし、之を料理した。あまりうまくなかった。又、その辺にはカタツムリが一杯居た。我々は之も取って食った。どうせ醤油は無し、塩だけで食った。

### 「あら勿体ない」

ある時、一年先輩の夫婦が訪ねて来た。山友達だからと雄国へ案内したところ、雄国沼が見えたたん、奥さんが「あらーこんな美しい景色、吾々だけで見るなんて勿体ない」。

こちらがびっくりした。こんな景色いつでも見られるのに。

### 「秋桜」

ネパールでは桜の花が秋に咲く。タンボチエからよね子と二人で下って来て、山の斜面の民家に泊まった。あたりを見ると、大きな桜の木に花が咲いていた。左側の山には昨夜降った雪が残り、まだ模様だ。シエルパにチャン（どぶろく）を買わせて呑みながら寝そべって居た。夜になったら村人が三、四人入って来て歌を唄い、踊り出した。私はそのチャンを振る舞った。いつの間にか眠ってしまった。無論、チャンの金は私が払った。

次の日、六人乗りのセスナ機が飛んで来た。



何紅

我々は之に乗ったが、一人のチベットの女が居た。聞けば、亭主がどこかの登山隊に雇われて行き、遭難して死んだ。その慰謝料を受け取りに行くところだった。その女は亭主がどの登山隊に加わったのかも、どこか山かも知らない。呑気と云えば呑気なのだが。

### 「スケベニンゲン」

ベルギーの海岸に「スケベニンゲン」と云う町がある。どんな人間が住んでいるのかと不思議に思い、わざわざバス賃を払って行って見たが、普通の男と女しか居なかった。バス賃と時間を損した。

### 「ラクダの鈴」

アフガニスタンの西端の町ヘラートに泊まった。ホテルの名はナイヤガラホテル、ところが彼等は「ニヤグラホテル」と読む。骨董屋でラクダの鈴を見付けた。之を買おうと思ったがいくら値切っても余りまけない。もう夕方でイラン行きのバスはない。ついそこ



で一泊し、次の朝また交渉して少しまけさせた。その為、よね子と二人の宿賃が二百円かかった。鈴は結局三十銭、ホテル賃を入れて二百円三十銭に付いた。

### 「自由行動」

インドネシアに行った時だった。或る午後、これから自由行動だと云うが、街中でもなし、小さな店が並んで居るものを見る所もない。すると若い女性の添乗員が、私と一緒に行きましよう云う。目の前には小高い尾根があった。何と云う山かと聞いたら「キンタマーニ」だと平気で云う。びっくりして顔を見た

が平気な顔をしている。その山の上の茶店でお茶を呑んだ。目の下には小さな湾があり小さな港があった。その港の名を聞いたら「ギリマン」だと云う。又おどろいてしまった。

### 「旅行記」

昭和四十五年（六十五歳）から海外に行き出し、これで五十五回になった。始めは一年置きだったが、段々一年に四回、五回となつていった。その度に旅行記を書いて居るが、どうも文学的素養がないため、後で読んで見るとさっぱり面白くない。

椎名誠の本を読むとなかなか面白い。なる程、こう云う風に書けばいいんだなと思った。Aが何と云った、それに対しBが何と答えたと云う風に書いてある。

そんなことを一々覚えて居られるもんか、皆自分の創作だ。よし！今からこう云う風にウソ八百を書いて見よう。

### ☆略歴☆

明治38年（1905） 福島県喜多方市に呉服屋の長男として生まれた。中学の頃、博物の先生の指導で山の魅力を知った。

昭和12〜21年 日中戦争、太平洋戦争に従軍。

昭和21年3月 帰還

昭和29年〜 ガソリンスタンド営業

### ●編集子より

『雲烟万里』は、冠木さんが「雑記録」と題して書き溜めてきた小文とスケッチを、長女が平成10年（93歳の時）に本にまとめたものです。旅先で出会った人や物についての寸評、戦地での思い出話などを小話風につづつた一〇話ほどが収められています。



10/14

5:30 P.M.

メルゲの遺跡で

### カトマンズ便り（2）

横山 皖一（昭27）

カトマンズの朝は「ナマステ」で始まる。ナマステは挨拶の言葉で、東アフリカの「ジャンボ」と同じで朝、昼、晩、夜に使う。いつでも手を合わせてナマステと言えばよい。私は「飲まして」と覚えたが、飲ましてと言っても通用するから面白い。

カトマンズの道を歩くのは十分注意が必要。道のあちこちに、歩道にも犬の糞、牛の糞、どうした訳か人糞まで落ちている。道は荒れて、穴ぼこだらけ、雨期には水が溜まる。2、3米の道にオートバイが入ってくるし、急に横から大きな荷車が飛び出してくる。また、ネパール人はよくツバキを吐き、手鼻をかむから、これも要注意。

私の通う王宮への道は4〜5米だが、人の沢山歩いている上に自転車、力車、テンプー（自動三輪車）、オートバイ、自動車が走る。一方通行なのだが自動車を除く総てが平気で逆走してくる。ただし、日本以上に治安が安

全なのは有り難い。夜暗い処も問題なく一人歩きができる。

物価は非常に安く現在の相場（2000年9月）で1ルピー11・5円、計算すると日本の値段はあまりにも高すぎる。日本の工業生産は超一流だが、古いしきたりに胡座をかいている流通業、運送業その他は、宅急便を除き二、三流と言われており、これが一流になれば私たちの暮らしはもっと楽になるのだろう。どうして、フランスのワインがインド経由で鉄道、トラックと運ばれるのに日本よりずっと安い値段なのか、米国の有名な運動衣類、ゴアテックスが日本の三分の一の価格なのか。日本の業界は何処がおかしいようだ。

閑話休題 10月28日からチベットのラッサに行つてきました。ネパールは外国人に年間滞在150日の制限があり、私の場合12月5日に切れるから、これをチベットに11、12日滞在して延ばすことがもう一つの目的である。Waitingの切符が取れたのは出発の前日、乗客はリュックサックを背負った外国人旅行者ばかりでした。エベレストを右に見て飛んだのだが、風防ガラスが傷だらけで良い写真は撮れなかった。

ネパールの緑の山々はチベットに入ると茶色の山々になる。ラッサ空港の周りは岩と砂の山だけだった。空港の外に出てみると旅

行業者の手違いから出迎えの人は居ないし、ホテルの予約もないといった状態。機内で隣だった中年のスイス人女性写真家に安いホテルを聞いていたので、彼女と同行して一日10ドル（80円）、トイレ、シャワー共同の部屋を確保出来た。また、前払いの車代が着いていないのでラッサからカトマンズ3日間、6400円を場合によれば一人で払うことになるので、同行者を求める張紙を作って掲示板のところへ行くと、いろいろの連絡が並んでいる。

最終的に2台のジープに英国、カナダ、オランダ、フランス、オーストラリアの混成舞台10名（最年少25、最長老は私、50歳の男2名、残りは40〜30代）、ガイドは用意できないといのでガイドなしで10月4日、ラッサからカトマンズ3日間の旅に出発することになった。

3日まではラッサ（高度3600m）周辺の観光をした。丁度一万mくらいを鶴らしい鳥が小さくキラキラ光りながら飛んでいたのが印象に残っている。ポカラ王宮は曜日により入れないことがあるから注意のこと。また朝8時に門が開くので正面の入口から階段を一步一步登るのがよいと思う。

10月4日 朝7時ラッサ出発。ガイドのいないのが後で問題になるとは、この時は判ら

なかった。飛行場を通り越して1時間半、ジープはここで待機し私たちは湖を渡る船に乗る。約1時間、対岸には小型バスが待つており半砂漠の道を桑那寺に向かう。夕方、寺の前にバスが停まっていたので運転手に明朝7時半出発を交渉し、食堂にも7時食事として全員注文を渡しておいた。

夜8時頃リーダー格のカナダ人が私の処に来て一緒に来てくれと言う。行ってみると中国人と坊さんが中国語で何か言っている。早く話されるとよく判らないからゆっくり話してくれと言ったが、よく判らない。筆談も交え、彼らはある寺に行くので6時半に車を使いたいということが判った。判った（我明白）、ただし不同意（タンスイ、プートンイー）と言つて断つた。ジープが2台湖の対岸で待つているとい片言の中国語は何か通じたらしい。

10月5日 問題なく7時半にバスが来て、フェリー？で湖を渡り、9時半に出発することが出来た。飛行場を通り越してラッサへの道と分れ、未舗装の山道にはいる。これが昔のカトマンズ街道で、今は北側の平坦なところを走っている。

急坂を車は喘いでいたが12時25分 Kamba La（峠）4970mに着いた。タルチョー（祈願幟）のはためく峠から白いヒマラヤの山々。感激の一瞬である。峠から下ると美し

い湖の畔を走る。次の Karo La (5045 m) では水河が歩けば15分くらいの処まで迫っている。観光客目当てのチベット人がヤクに子供を乗せて水河を背景に写真を撮らせようとしている。もう一つの峠 Simi La を越えてギャンセ (3800 m) に着いたのは午後6時40分だった。中国はあの大きな国で時差がないから、一番西のチベットではまだまだ明るい時間である。

ここでガイド無しが問題になった。外国人旅行者をチェックしている役人が、ガイド無しではここから先に行くことが出来ないと言う。すぐカナダ人がラッサに連絡しガイドを送って貰うことにした。

10月6日 ギャンセのすぐ側の山に昔の立派な城が残っており、歩いて15分の白居寺の見学で時間を潰したが、ラッサからのガイドが来たのは夜の8時なので、ギャンセの街で泊まらざるを得なくなった。

ガイドの料金を別に支払えと言う話になったのだが、カナダ人が出発前に契約書を取り交わしており、これにガイド代支払い済みとあるので追加支払いはなくて済んだ。日本人だけだったら契約書は作らないから、ガイド代は支払わされていただろう。

10月7日 ギャンセを7時の暗い内に出発、水田地帯を走りシガッセの街に着いたのは9

時30分。12時集合として分れてお寺を見学、力車に乗って15円で市街を一回りしたが、完全に中国式の町並みになっていた。12時15分発、Yangu La (4950 m) は3時35分、4時、この間は所々簡易舗装されており、ラッセ着4時50分。ここでは1000元の一人部屋に泊まったが、シャワー、トイレは外の共同使用である。

10月8日 ラッセ発7時20分。5200 m の Gyaso La (8時30分着)。前の Yang La と同じでタルチヨの花盛りであり、遠くにヒマラヤの山々が横たわっている。この辺からは高原状の処を道は走っていく。9時50分、やっとエベレストが姿を見せてくれた。チベットの空港に着いた時からだが、低山は総て岩山、砂山で、この季節は総て茶色、ネパールの緑の山の向こうに白い峰々が見えるのと全く異なった風景である。

ちよつとした車のトラブルで30分ばかり停車したが、シエガール(ニユーテングリ)着11時30分。昼食後、高山病の一人を置いて午後1時出発。第一のチェックポイントでは、各自のパスポートとシエガールで買ったエベレスト地区への入場料の半券をまとめて運転手が持つていくと約5分でOK。1時30分に分岐からカトマンズへの道と分れて左に曲がっていくと第二のチェックポイント。また

パスポートをまとめて渡すと兵隊が一人来てパスポートの写真と照合していく。ここから初めは幅2000 m くらいの河原を右に左にと登っていく。雨期の時には道は大分荒れるらしい。

2時20分、Pang La (5200 m) に到着した。この眺めは素晴らしい。エベレストを中心に左に Mt. Makalu、Mt. Lhotse、右に Mt. Cho Oyu など。望遠を取り出し何枚もの写真を撮ることが出来た。

2時45分出発、ロンボックまで人は住んでいないと思っていたが、峠を下っていくと次々と部落が現れ、五つの部落があり、川の側から棚田のように耕している。ヤクや羊の放牧場を通っていくと2時20分、エベレストが顔をだした。ロンボック寺院(5030 m)に到着5時30分。荷物を置いて写真を撮りに出る。食事後の7時頃でもまだ明るいから、結構寒かったがよい写真を撮ることが出来た。

お寺所属の宿舍食堂で、数えると40人は居たから50人以上は泊まっております、これが毎日なら大変な収入になるだろう。宿所といっても小さな一部屋に3ベッドだけのドミトリー?で泊まり賃は一日10元、トイレは中国式の土間に穴の開いてあるのが2つだけ。私の朝のお勤め?にも人の気配は全くなかったから多くの外国人は中国式を避けて外で用を

足したのだろう。これは大変な黄害である。

10月9日 ベースキャンプへのトレッキング。8時20分出発。5030mからなので慎重に(5000mになると酸素は平地の半分。前日は酒を遠慮した) ゆっくりと歩く。携行品はカメラと望遠レンズ、三脚、テルモス、インスタントコーヒーに非常食のみである。エベレストBC(5300m)到着は10時50分だった。

ここにはトイレが2ヶ所あり、中型のテントで現地人がお茶など出しているようだった。少し上がったところに小屋があり、閉鎖されていたがその上からのエベレストは非常に大きく、300ミリの望遠に入り切らなかつた。ロンボック氷河まで歩いて20分くらいらしいが、帰りの車の時間から行くことは出来なかつた。このBCまではジープが入り、往復乗る人、高山病で帰りに利用する人がいる。私は歩くことにしたが、同行10人の中で往復歩いたのは3、4人だった。5000mのトレッキングは予想したより大したことはなく、昨年の四川省チベット高原(平均4000m)とラッサに来てからの高度順化がうまくいったようだ。この調子だと6000mも大丈夫かもしれない。

午後1時30分、宿到着。昼飯を食べて2時30分に予定通り出発。途中7、8頭のアンテ

ロープが岩山を駆け上がるのを見ることが出来た。また昨日はいなかつた黒い鳥の群が沢山とんでいた。Pang La(6時45分)、昨日より山に雲が少なく沢山の写真を撮ることが出来た。

カトマンズへの分岐で、高山病で同行しなかつたオランダ人男性を迎えに行く間待っていた。やっと日が陰ってきた8時45分、車に着いて、オールドテングリ着9時30分。この前後から完全な高原状の地形に変わり、道路は水害の影響を受けないから数カ所を除き舗装されていた。

10月10日 今日カトマンズに帰り着く日なのでオールドテングリを6時40分、暗いうちに出発する。8時40分に最後のエベレストを遠く眺め、チベット高原をLalung La(5050m)へ向かう。

峠は高原の上であり10時到着、20分の休憩の間に最後のヒマラヤの写真を撮る。これからは下りばかりなのだが、正規の道は大型トラックだけが走り、ジープはショートカットで高原の雑草地帯(この時は枯れていた)を勝手に道を造っていくので環境破壊も甚だしい。10年後にどうなるのだろうか。

下りに下ってニヤラム11時40分、中国最後の街ツァンガムにチェックポイントがあり、一人づつパスポートを見せる。ここを通る前

に中国最後の食事をするが車の周りに札束と計算機片手の個人換金売人が押し掛けてくる。中にはレストランまで入り込んでくる。

ツァンガムは崖に出来た街で、七曲がり八曲がり非常に多くのトラックの滞車を見かけたが、ラッサで聞いた情報の通り国境まで道が悪いらしい。大勢の兵隊がスコップを肩に国境の方から戻ってきたので、道は修理されたかと食事後、ジープで3分の2位の処まで行くと登りのトラックが悪路を通れずに停まっている。

一車線なのでどうすることも出来ず、車輪の下に石や木を入れたり、前の車がワイヤーで牽引したりしているが見込みも無いので各自荷を背負い歩くことになった。私は一人で歩き始め、ショートカットの急坂を降りていくと空身のチベット人が上がってきたので、中国語で交渉し、ネパールチェックポイントまで10円で担送を依頼することが出来た。

ネパール時間で3時5分、ビザ申請は簡単にすんだが車の交渉に時間が掛かり、一人10ドルでカトマンズまで行くことになった。車を待っている間にこの旅行で二度目の小雨にあった。一度目は10月3日ラッサでの軽い夕立だった。途中の休憩時にホテルに電話を入れておいたので5時30分ホテルに着くとすぐ元の部屋に入ることが出来た。

## 小樽の堀岡さんを訪ねて

山本 健一郎 (昭32)

スキーを担いで二セコに行くことになった。帰りに札幌に転勤した長男のところへ寄るとすると小樽を通る。堀岡さんには学生の頃、針葉樹会の席で一度お目にかかっただけであるが、この頃会報にいろいろお書きになっておられるところを見るとお元気らしい。年賀状に小樽を通るのでお目にかかりたいと書き添えておいたら、ぜひ寄る様にとのご返事を頂いた。まだ週に二度出社しておられる由、それくらいお元気ならお邪魔しても差し支えないだろうと、2月4日(日)の昼過ぎにお寄りしたいとご連絡したら、駅まで迎えに行くから到着時間を知らせろ、そして昼飯をどこかで食べようとのこと、この寒い季節に申し訳ないと思ったが、ご厚意に甘え駅でお目にかかることにした。

列車が着いて改札に行くところらしい方が立っているが、髪も黒々として七〇そこそこにはしか見えない。しかし辺りを見回しても

ほかにそれらしい人はいない。そこで堀岡さんでいらつしやいますかとお聞きしたら、やはり堀岡さんだった。

最高気温が零下一〇度という日が続き固く凍った雪道を、さつさと歩いて近くのホテルに案内して頂いたが、こちらがびっくりするほどお元気な歩きぶりである。

お昼をご馳走になりながら、いろいろなお話を2時間ばかり伺うことができた。シユナイダーの模範演技を見に野沢に行き、酒屋旅館(当時はここが山岳部の定宿・昔の針葉樹に広告を出してくれている)に泊まったところ、たまたま奥野綱重さんと同室になったのがきっかけで、予科2年の時に山岳部に入ったこと。毎月神田に出て三省堂に寄り針葉樹会に出席して孫さん、吉沢さんの話を聞くのが楽しみだったこと。浦松さんに奨められて取り寄せたベントのピッケルを大事に持っていたがアメリカ在住のクライミングの名手のお孫さんに譲ったこと。昭和六年の元日に磯野さんと鹿島槍に登ったとき雪庇を踏み抜いて落ちたが、その山行を通じて当時の名ガイド中山彦一の活躍に流石だと思ったこと(積雪期の鹿島槍に種池から爺を越えて登ったのはこれが最初の記録である)。卒業後三井物産の門司支店に配属になり、大牟田に転勤して来られた近藤さんとよく山に行ったことな

ど面白いお話をたくさん伺った。前述のお孫さんは、平山ユージが札幌で模範演技をした時、ルートの設定を手伝い、平山君の後ただ一人このルートを完登したとか。

すっかりご馳走になり、小樽観光のポイントを教えて頂きお別れしたが、本当にお元気なのに驚き、あやかりたいものと思った。今後もお元気で会報に追悼記事ではなく、昔のいろいろなお話を書いていただければとご健康をお祈りします。会員諸兄にはもし小樽に行く機会があれば、ぜひ堀岡大先輩をお訪ねするようにお奨めします。

## 毎日が日曜日

宇田川 徳治 (昭34)

こわい佐藤さんのご下命であるし、主題制約ナシのことなので、無事に生きている証にと近況報告風に纏めました。

\* \* \*

毎日が日曜日なので、生活リズムは週単位ということになります(月単位では長過ぎ



る。

月 将棋  
火 絵 or ゴルフ  
水 絵  
木 絵 or ゴルフ  
金 テニス  
土 掃除  
日 テニス

現在、一番多く時間を割き、面白いと感じているのは絵です。池波正太郎に出て来る江戸の坂道に興味を持ち、98年4月のリタイヤを機に、「江戸の坂道」というテーマでスケッチを始めることにしました。

しかし絵の才能の全くない（小学校ではお情けの良下）私にはとても坂道を坂道らしく描けません。そこで火曜日は銀行美術部の、水曜日は朝日カルチャー教室で勉強することになりました。

絵は写真と違い、対象をただ写せば良いという訳にはいきません（といったら写真家に叱られる？）。対象をどのように感じ、理解するか、またこれをどのように表現するのか、つまり感覚の純化と表現手法・技術が必要：と最近感じています（ कोरो とクールベがお気に入り）。

小さいスケッチは1時間位、F8の画面なら3〜4時間はアツという間に過ぎるほど集

中してやっています。下手なスケッチも人に見られることは全く苦にならなくなりました（かえってタバコ一服のオシャレが楽しい）。描いて来た絵をビールを飲みながら「あでもない、こうでもない」と自己批判（家内も加わって）するのも楽しいものです。

江戸の坂道には洒落た名前がついています。暗闇坂（くらやみ坂、麻布十番）、無縁坂（森鷗外の「雁」の舞台）、一口坂（いもあらい坂、靖国神社近辺）：等等。各区の案内標識がそれぞれあります。文京区のは考証もしっかりし、説明も丁寧ですが、港区のはお座なりでガツカリします。もともと文京区には「文京の坂道」との冊子があるそうですが、未だ入手していません。

\* \* \*

十数年前、銀行同期4名で始めた日曜9〜12時のテニスは、現在15〜16名の仲間となっています。特に誘った訳でもないのに、噂をきいて一緒にプレーしようという結果で、時には充分にコートが確保できず、ダベリングの時間の方が長いこともあります（これはこれでまた楽しい）。身体と心の健康の最大の功労者です。リストラ流行りですが、コートを保持している銀行には感謝感謝！

最近渋谷区のコートが利用できる（ラケットを置いた順に組を作りプレーする）ことが

分り、毎週金曜に出掛けています。いろいろなランダムな組合せで、オーソドックスではないプレースタイルもあり、銀行仲間にはない面白さがあります。貴重な地域交流の場です。因みに澁谷区では65才以上は利用料無料で大助かり（都美術館等も同様）。

700円で12時間（10時〜22時）楽しめるのが将棋です。雨の日には持って来いで、週間天気予報を横目に週の予定を組み変えています。場所は新宿歌舞伎町入口の将棋会所（店主は二上達也連盟会長）。リタイヤしてから週一度は通い、去る12月4日初段から3段に目出度く昇段しました。

昇段ルールは初↓2段が8連勝、2↓3段が9連勝と厳しいものでした。連勝の後半には上段者との対局ありのおまけ付きです。将棋は囲碁と違い「車夫馬丁の輩の遊び」と見なされています。王様がとられて負けと勝負の形が厳しく、負けた悔しさは一入で、どうしても感情表現がはつきり出易いのでしよう。しかし場所柄にも拘らず嫌なことは一度もありませんでした。近辺の「遊び人」風の人も来ていたのですが……。

ゴルフは金も時間もかかるし、腰を痛めそうなので、去る5月の週日クラブコンペの優勝を機に、ホンのお付き合いに止めるか？と思っっています。しかしパットのオリンピッ

ク・ベットで終了後ワイワイいいながら飲む  
アルコールの誘惑に克てますかネ？

土曜日の掃除はリタイヤ後の家内への言訳  
せめて一日位は家の仕事をと、外回りの掃除  
をやっています。最近井の頭街道が拡幅され  
立派な歩道と植込みが出来たので、家の前を  
中心に300メートル位の吸い殻、空き缶な  
どのポイ捨て拾い、落ち葉掃きもやり出し  
ました。たった一人のささやかなボランティア  
という訳です。それにしてもかつて外国人に  
も感嘆された清潔な日本人は何処にいつし  
まったのでしょうか。……ボヤキ節が出て来  
たので、この辺で。

\* \* \*

残念乍ら「山」は現在の生活リズムに入り  
込む余地はなさそう。リタイヤ時の万葉集研  
究も全くの構想倒れに終わっています。

## ぐうたら登山紀行

大 建二郎 (昭37)

昭和37年卒のメンバーを称してクロー会と

いう。一年前にヤロー会という強力な団体がある  
のでかなり影が薄い、総勢六人、有名な倉知と、  
あまり有名でない宮本、三井、朝木、遠藤と小生  
で成り立っている。その有名な倉知から、針葉樹  
会報も格調高い山行記録だけではなく、身辺雑記  
風な記事も載せることにしたので、「ほら、例の怪  
しげな仲間うちの山行の記事も書け」との御下命  
あり、やおら無精な筆をとることとした。

○

五年前のある日、クロー会の集まりでいつもの  
如く酒を飲んでみると、われらも齢六〇を間近に  
して、早く山を復活しないと永遠にお別れになっ  
てしまうぞとの声あり、とにかくどこかへ行くこ  
ととなった。

なにしろ二〇年位のブランクのある者多く、もの  
の一時間も登ればバテるといふ恐怖感から、同じル  
ートを登って下り、落伍者を拾って帰れる山、かつ  
百名山でまだ登っていない——帰ってから他人に威  
張れる——山などいろいろ注文が付き、決まったの  
はなぜか恵那山であった。日にちもクロー会をもじ  
って九月六、一九九七年のことである。

○

六日の昼、八王子駅へ集合したのが、倉知、宮本、  
遠藤、大と客員の一年下の高橋の五人。三井は詳  
細なプランを作って張り切っていた

ものの、数日前に足をケガして欠場。病み上がり  
で運転手に徹するという遠藤の車で中津川に向か  
った。昔の山登りの時は想像も出来ない立派な  
旅館に泊まり、大いに意気揚がったものの、先日  
の台風で沢が崩れ、黒井沢登山口より一時間も  
手前までしか車が入れないと聞いてガツクリ。こ  
こまで来た以上はと、弱気の虫を袋に閉じ込め、  
翌朝は六時頃から歩き始める。ゆっくり目のペ  
ースではあったが、一時には頂上を踏むことが  
出来た。途中、六〇半ばとおぼしきオバサン二  
人組を抜き去り、若い人は元気ねと言われる快  
挙もあり、結構登れるではないかと自信を取り戻  
した。——と思ったのはその辺までで、下りを  
一時間も過ぎるとヒザに痛みが発生し、元気の  
倉知、高橋とヨロヨロ下る小生と宮本に大幅な  
差が生じ、下りがこんなにシンドイとは初めての  
経験だと騒ぎながらすっかり暮れた山道を戻った  
ことであった。

○

ヒザの痛みもすっかり忘れて翌年九八年は、  
病から回復して来た遠藤も登れそうな山とい  
うことで那須へ行くこととなった。今回は九月  
六日にこだわらず、八月一六日に那須温泉  
塩原駅に、三井、遠藤、大は東京から、倉知  
は会津の山を登り終えて集合。宮本は恵那山  
でコリて、モトクロスに転向してしまった。

一六日はとにかく簡単に登れるということ  
茶臼山に登り、その後倉知の推薦する北温泉  
という三百年も続いており、今も車は入れな  
いという鄙びた温泉に泊まった。二人も腕時  
計がなくなるという怪事件があったものの、  
古めかしい迷路のような秘湯を堪能し、翌日  
は今にも降り出しそうな中を三井と大は三本  
槍へ、倉知と遠藤は帰京。

三本槍は、宿の裏からの一時間余りの急登  
以外はさしたるバテも無く、途中からの雨の  
中を黙々と歩いて何も見えない頂上へ。ほと  
んど人に会わない静かな山行であった。

○

三年目の一九九九年は、百名山で残ってい  
る中から簡単で温泉のある山を、というグウ  
タラ派の意見が勢いを得て、本格派はアイソ  
をつかし、三井、遠藤、大の三人となつてし  
まった。神戸にいる三井が一切を仕切るから  
と四国へ行くこととなった。八月七日に羽田  
から徳島へ飛び、レンタカーを借りてその日  
のうちに剣山に登り、伊予西条まで行って泊  
まり、翌日石鎚山に登って、道後温泉に泊ま  
り。九日にしまなみハイウェイで尾道に出て  
帰京。

剣山は曇りのうえ猛烈な風で、カラダを45  
度斜めにしてやっとガスの中を頂上にたどり  
つき、石鎚山はどしゃ降りの雨の中を黙々と

歩き、途中の鎖場で危うく転落しそうになり  
ながら何とか頂上まで行けたという心掛けの  
悪さ。剣山頂上の小屋には、宮尾登美子の『天  
涯の花』のNHKドラマ化ロケ隊が泊まって  
いて、ずっと天気の良い日が続いていて間に  
合わないと言っていたので我々だけのせい  
ではない。

○

二〇〇〇年は四年目となり、昨年の四国巡  
りで相当自信が付いてきたので、グウタラ派  
に一層の力がかけ、山↓温泉↓ゴルフ  
↓山という究極のパターンに挑戦？すること  
となった三井、遠藤、大の三人で、東北へ出  
張って行くこととなった。重箱の隅まで網羅  
する計画を得意とする三井スケジューラー？  
から早くも五月には、青森空港↓岩木山↓早  
池峰山というモデルプランが届き、即決定。

八月一五日、お盆の真つ只中でも羽田↓青  
森便はガラガラ。空港からレンタカーで一路  
岩木山へ。有料道路、リフトと乗り継いで登  
山口へ。約四〇分歩いて頂上。ガスで展望効  
かず、恵那山以来六つの山すべてガスか雨の  
中というのはいかなることであるのか。

温泉とゴルフ、ましてやカラオケに興じた  
話は、いくら身辺雑記風でもOKとはいえ、  
会報にそぐわないので割愛。

早池峰山は良かった。初めて快晴。河原坊

を八時に発って約三時間、沢づたいの道から  
ほとんど木の無い尾根道を急登し、もうひと  
がんばりかというところが頂上であった。東  
北の山が一望の下にあり、一昨日登った岩木  
山らしい姿の良い山も遠望できた。下りはヒ  
ザにも来ず、小田越に出て車道を三〇分歩く。  
病み上がりのはずの遠藤が一番元気で車をと  
りに行って迎えに来るといっておまけもあった。

\* \* \*

四年目にして山と温泉、ゴルフ、カラオケ  
付きという登山スタイルが完成し、小生はこ  
れをぐうたら登山と称し、三人をクロウ会ぐ  
うたら登山分科会メンバーと呼んでいるが、  
恥ずかしいから極楽登山と呼んだほうがよい  
という強力な意見もあり、結論に至っていな  
い。

なお二〇〇一年は、一月五日に分科会メン  
バー十倉知で新年会を行い、早々に九州へ行  
き、九重山と祖母山に行くことが決まった。  
併せて目下、視力が落ちて登山休止中の朝木  
が六月に東村山から都議選に出るといので、  
その祝勝会または慰労会をやらねばというこ  
ととなった。以上報告まで。

## 「日本百名山」 全山登頂に思う

高橋 信成 (昭38)

### (一) 一念発起

平成十二年八月二十六日に登頂した乗鞍岳を最後に、深田久弥さんの定めた日本百名山に全山登頂する事が出来ました。同行して一緒に登った方々やご協力願った方々のお蔭と感謝しお礼申し上げます。

この山行は一九五一年に父に連れられて初めて登った焼岳から開始して二〇〇〇年まで五十年掛かり、私個人にとっては記念すべき事でもあるし最後の数年間は会社勤めの合間に確かに相当力を入れてやった事ですが、もう何百人か何千人か知りませんが沢山の方々が全山登っているだろう事を思うと皆さんに発表する様な事かどうかちよつと恥ずかしいような気もして、前から石原会長や会報幹事から原稿を書くように言われてはいたが進めていませんでした。

とはいえ日本百名山に登る事によって自分ながら良かったなと思う点多々あるので、

記録しておくことも必要かなと考えていた矢先に佐藤先輩から催促の葉書を受けてしまい、まとめる事となった次第である。

登った百名山を時系列に、標高や同行者の欄も加えた一覧表をエクセルで作成して一部の方には渡していましたが、これだけだと簡潔明瞭だが味もそっけもなくでどんな考えや思いを持って登っていたのかも判らない状態であった。

日本百名山については、文庫本になっているものやガイドブックの類を入れると何冊も購入したが、私が最初に買ったのは深田久弥さんの新潮社から出ている昭和四〇年六刷目のものである。私は昭和四〇年三月三十一日付で倉知さんの紹介で日本山岳会に入会し、すぐに図書委員ということで当時図書委員長であった深田久弥さんを囲んで委員会に何回か出席した記憶がある。そういうことで深田久弥さんの日本百名山は本で知ってはいたが自分でこの百名山を全山登頂しようという考えは当初は全然持っていなかった。

百名山を全部登ってみようと思いついたのは、一年後輩の蛭川さんの影響が強かった。一九九四年の利尻岳に登った頃、踏青(とうちん)会(山岳部昭和39年卒業組の会名)に特別参加させてもらったり何回か会う機会があったが、彼はそのたびに百名山に登っている

話を楽しそうにしていた。始めは聴いているだけであったが、しばらく経ってから目標を立てて登った方がよいかと思うようになってきた。

ただ思い返すと、この年に大台ヶ原山に登っているが、近くの大峰山には行っていない。熊野古道にひかれて熊野本宮大社を参拝して川湯温泉に泊まったり、翌日新宮神社・那智神社を参拝して大雲取山に登ろうとして隣の山に登ってしまった事、また大台ヶ原山に登る前の日は高野山に登り、宿坊に泊まったことを思うと、この時はまだ百名山全山踏破を目指していなかったと思う。

百名山に絞り込んで集中的に登り始めたのは一九九五年からで、この年に赤城山・瑞牆山から始めて、北海道の山も含め十四座に登っている。一九九五年が私の百名山踏破を思い立った一念発起の年だったといつてよい。一念発起する前に既に四十四座登っていた。逆にこれだけ登っていたから一念発起できたということもいえるかもしれない。

### (二) 小・中・高・大学での山登り

一九五一年私が小学校六年生であった時の夏休み、父に連れられて上高地の旅館で一泊し、翌日焼岳に登ったのが第一座目の百名山の山である。島々でザイルを肩に担いでいる

人を見たり、小梨平のキャンプ場、前穂から連なる山々等の印象は子供には相当強かったらしい。

そのころ父は、駒込で紳士服店を経営していて、私は仮縫いの糸を抜く仕事を一着五円で手伝い、一年で二五〇着分程やり三人用のテントを買った。相模湖や奥多摩にそのテントをもって一人で自然の中に入っていった。友達と逗子へいき海岸近くの松林で何泊かした事もあった。このテントは大学時代に八ヶ岳を縦走したときにも利用した。

中学では、遠足で筑波山に登っている。テントはあちこちで利用したが百名山は、登っていない。

高校では、男体山・丹沢山・大菩薩嶺に登る。駒込にある聖学院高校というミッションスクールで、山岳部があった。夏休みに甲斐駒ヶ岳から鳳凰山への登山があり参加した。クラスメイトと富士山にも登っている。

大学時代は山岳部に属した。一年の夏合宿は剣岳剣沢の定着と立山・薬師・黒部五郎・槍ヶ岳の縦走合宿。秋は、燕岳・常念。蝶ヶ岳から横尾において北穂・奥穂・前穂へ毎日往復した。帰って来て盲腸炎となり、三ヶ月も駒込病院に入院する羽目となった。

二年生の冬、妙高岳の麓の笹ヶ峰でスキー合宿を行い妙高山に登った。この時は外輪山

に登ったのでずっと後に改めて頂上に登っている。

三年生の六月、北穂の手前でテントを張り滝谷クラック尾根・第一尾根・第二尾根。第三尾根・ドーム中央陵等に登攀。ラジオでアデス遠征のニュースを聴いていた事を思い出す。三年の夏合宿も剣沢で定着、縦走は五色ヶ原からいったん黒部川に下り黒部ダムがまだ出来ていない頃であり吊り橋を渡って針ノ木峠に登り後立山連峰を北上した。五竜岳・鹿島槍ヶ岳はこのとき登っている。ラジオで嵐が接近しているという事もあり八方尾根を下った。秋に単独で七倉から北葛岳へ登り南下して不動岳でビバークした後、烏帽子岳・野口五郎岳を経て鷲羽岳を登頂したが、水晶岳は縦走コースから少し離れていたし当時日本百名山という概念が私の頭になかったため登頂しなかった。

四年生の夏クラスメイトと北八ヶ岳から南下して赤岳を経て小淵沢へ出た。冬は合宿で、木曾駒から宝剣岳・空木岳を雪の中登頂した。

### (三) 入社以降の百名山登山

一九六三年（昭和38年）入社翌年、会社のハイキングクラブの合宿で南アルプスの塩見岳・荒川岳に登っている。結婚する前の妻と東北を北から南下して八幡平・磐梯山に登頂

した。

一九六五年五月連休には一人で南アルプスへ向い金谷から大井川鉄道に乗り終点まで行き、そこで日本山岳会員の若い女性登山者と二人で登る事になった。光岳に登り光小屋に二人で泊まった。聖岳・赤石岳へ登ったが泊まったのは聖平小屋と赤石避難小屋であったと思うが記憶が定かでない。小渋川へ降りてどこかで風呂に入って帰った記憶がある。

当時妻と付き合っていて結婚も予定していたので別の女性と登山とはいえ三泊も二人で過ごしたとなると特別のことは何もしていないといっても誤解されてもいけないので、帰京してから写真を交換したりしたが、それらを皆処分してしまったので記録が残っていない状況となってしまうた。同行したその若い女性はその後剣岳周辺で遭難死したと聞いている。

結婚後一九七〇年に那須岳に登っているが、一九九四年まで日本百名山の登頂数は増えていない。当時茨城県に住んでいたので筑波山に登ったり愛宕山に登ったりした事はあるが育児・仕事という事もあり山から遠ざかっていった。

四十歳代は、勤務先が電機会社（富士電機）であったので水力発電・火力発電所の海外建設現地へ行くことが多くなり、リビヤのミス

ラタ製鉄所の発電所・ネパールの第二クレカ  
二発電所半年・パキスタンのジャムシヨ口発  
電所一年・サウジアラビアのマッカタイフ淡  
水化プラント発電所一年半等と、外国で過ご  
していたため踏破名山数は止まったままで  
あった。

しかしパキスタンでは、休暇を利用してギ  
ルギットの奥フンザ王国まで行き、ナンガパ  
ルバートやラカポシを肉眼で望見できる機会  
に恵まれたのは幸いであった。またサウジの  
ジエッタからケニヤに行きキリマンジャロや  
ケニヤ山を望んだことも忘れられない。四十  
歳代は名山登山にとっては、不毛であったと  
いえる。しかし当時はまだ百名山踏破の一念  
発起をしていない時期であった。

#### (四) 北海道の名山及び行き帰りを

##### 利用して登った山

北海道には目標の名山が九座あるが、登る  
にあたって北海道在住で北海道電力に勤務し  
ていた昭和四十年卒の小野肇さんに大変お世  
話になった。一九九四年から四年間、毎年夏  
北海道を訪問した。小野さんは既に何回も登  
頂しているにもかかわらず利尻岳・十勝岳・  
大雪旭岳に同行してくれた。そのほか全部の  
山についてコメントをくれたり資料を送って  
くれたりで有り難かった。

一九九六年夏の幌尻岳登山は、上原先輩・  
有賀先輩と三人で霧の中を登頂した。この報  
告は、針葉樹会報に載せた。

私は北海道へは四回とも自動車で行ってい  
る。八戸からフェリーで苫小牧へ渡る事が三  
回あったが羊蹄山に登るときは青森から函館  
行きのフェリーを利用した。北海道へ渡る前  
に東北の山へ登るといふ事もしばしばあった。  
秋田富士・岩手山は行く前に登った。北海道  
の帰りに登った山は、早池峰・八甲田山・岩  
木山・鳥海山・月山・蔵王山・西吾妻山・会  
津駒ヶ岳・平ヶ岳がある。

#### (五) 四国・九州の名山

四国の名山二座は一九九七年、ゴールデン  
ウィークを利用した。車で東京を出発、祖谷  
溪谷でテントを張って翌日剣山に登頂し、善  
通寺・前神寺・吉祥寺・香園寺等、四国霊場  
八十八ヶ所の寺のいくつかを参拝して国民宿  
舎石槌に宿泊し翌朝石槌山に登頂した。妻と  
同行であった。九州の名山六座は、翌年の同  
じ頃、車で北からまわった。中津で福沢諭吉  
の旧宅を見学したあと宇佐神宮を参拝して近  
くの旅館で一泊した。

——私は大学のゼミナールでドイツ社会の  
勉強という事でルカーチの「若きヘーゲル」  
論を二年間、毎週研究室で読んでいたり、ル

カーチのトーマスマン論を大畑末吉先生の目  
白の自宅と一緒に読んで頂いたりした。ヘー  
ゲルは周知のように歴史を哲学の中に持ち込  
んで来た人であるし、トーマスマンもある時  
期フロイドやユングの影響を受けた。精神異  
常者の分析においてもフロイドは、幼児期体  
験が多くの場合、遠因となっているケースが  
多くこれを重視していた。ユングは更に進め  
て成人になったあとの精神異常の原因を胎児  
の時期に求めている。個人レベルにおいて幼  
児期・胎児期は民族や人類に当てはめると太  
古の時代や伝説の時代となってくる。この関  
連でフロイドは、現在の人類を理解するため  
にも、「モーゼと一神教」という文章を残し  
ている。トーマスマンも「ヨセフとその兄弟  
たち」という創世記の物語をくわしく小説で  
展開している。——

こういう事情で私は古いものに関心を持つ  
ところがあり、名山をめぐっても周囲にある  
古い神社や遺跡に惹かれて出来るだけ見学し  
たり参拝したりしている。宇佐神宮を参拝し  
たのもそのためだった。

翌日、安心院近くのストーンサークルを見  
学して、湯布院を経由して久住山に登る。そ  
の翌日、阿蘇山に登ったあと高千穂峽を見て  
天の岩戸神社を参拝、神官の案内と説明を受  
けた。翌四月二九日、祖母山に登頂した。そ

の後韓国岳・高千穂岳・開聞岳を登って長崎へ周り、大隈重信の旧宅や吉野ヶ里遺跡を見学後、志賀神社・宗像神社を参拝した。九州の名山登山は南方方面から渡来した古代人に思いを馳せながら楽しい登行であった。九州も妻と同行であった。

#### (六) オオナムチの神を祀る名山

日本百名山を登ってよかつたなと思う点が多々あると先に記した。山々の美しさや季節の変化を感じる事ができたこと、目を閉じると儼に北は北海道から南は九州までの山並みはずうつと想起できる事等あるが、古くからの歴史のある名山に登ると普通ではめぐり合えないような発見が出来ることではないだろうか。

大山・白山・立山では、オオナムチの神を祀っている。百名山には入っていないが三輪山もオオナムチの神を祀っている。大和朝廷によりアマテラスオオミカミを頂点とする神話体系ができ、それが正統化されてきたが、それ以前の古代人が信じていた神々が古い伝統のある名山や神社でいまだに祀られている。オオナムチは、大汝・大穴牟遲・大己貴・大穴持等に表記されるが、製鉄に関与した神であるとされている。この神と中国の山東半島の鉄神である「しゅう」や兵主神との関連等

を調べていくともつと面白いのではないかと思われる。

#### (七) 九十九座目の山白山

日本百名山もそろそろ終わりに近づいてくると様々なことを考える。白山は深田久弥さんの故郷にも近く「白山は、生家の二階からも、小学校の門からも、鮒釣りの川辺からも、泳ぎに行く海岸の砂丘からも、つまり私の故郷のどこからでも見えた」と記している。特別な感慨を持っていたし、山岳開眼の山であったとしている。

私にとつてもオオナムチ(大汝)の神を祀る歴史上も由緒ある山として映っていた。白は漢字の百から一を外すとできる字でもあるので九十九の意味もある。白寿といえは九十九歳のことになる。私は誕生日が九月九日なので、九という字には以前から格別の愛着を感じていた。そういうことで百名山の九十九座目は白山にしようと考えていた。

これは白山がまだ登っていなかった山でもあるし九十二、三座目の頃にそういう考えを持つようになった。また一九九九年に登ろうということに登る日も九月九日としたいと思った。さらに時間も九時九分にしようということになっていった。同行して頂いた小野さんには、たあいもないことにつきあっても

らうことになってしまった。

九十九座まで来たのであと一座が残っていた。一九九九年中に全山登頂も可能であったが、五十年かけて踏破した形にしたいので百座目は、どうしても二〇〇〇年に登ることにしたかった。

#### (八) 百座目乗鞍岳

一座目が焼岳であった。やはり私は日本アルプスが一番数的にも長く入山していたし印象も深かったのかもしれない。また祖父が関東に出てくる前は、先祖はずうつと岐阜の則武村(今は岐阜市に編入されている)にいたということもあり、私自身は岐阜に長く住んだことはないが、何となく郷愁を感じていたこともあった。最初に登った名山も岐阜県と長野県との県境であったし、岐阜県にある山を最後の山にしようと考えた。

深田久弥さんは、「乗鞍は登ると言うより、住むという方が似つかわしい山である」と記している。多くの人が若い頃に登っているが、私はアメリカの生産子会社副社長が会社の松本工場で実習している時に上高地から乗鞍スカイライン経由で一日車で案内した時に肩の小屋まで来たことがあったが、何故か頂上を踏まずに長い年月を過ごしてしまった。

百名山を登っていることは以前から周りの

人には話していたので、中には最後の山は一緒に登ろうと言ってくれていた人もいたので、比較的早くから予定を立てていた。二〇〇〇年八月二六日(土)に豊平の上の肩の小屋に11時30分集合ということになった。

当日は大学のクラスメート六名、会社関係六名、針葉樹会員三名が参加した。土曜日ということもあり東京を夜中に出発した人は早く8時頃到着できたが、前日穂高カントリーでゴルフをしたクラスメート六名をのせた蛭川さん運転の車は、渋滞により豊平の前で停まったままになり今日はもう頂上には登れないと考えた人もいたようだ。

私と松本工場出身の猿橋さんは、島々の駅で列車で来る竹中さんと熊倉さんの二人を待った。参加者のなかには最初から頂上迄はしんどいので豊平でぶらぶらしているよという人もいたし、犬を連れて来た井上さん夫妻は乗鞍高原でコーヒーを飲んだりして楽しんでた。

私達は、肩の小屋の下の雪溪の下にある駐車場に車をおいて雪溪横の道を登った。肩の小屋では前に出発していたクラスメートと偶然に会えた。12時を過ぎていた。食事をして登り始めた。途中、携帯電話で連絡をとっていた寺南さん福島さんは早くに到着して先に登頂し、下って来るところで会うことが出来

た。

13時38分頂上到着。同時に頂上に到着し、記念撮影ができたのは丁度十名であった。最所・阿出川・永森・宮下・内藤・大神・蛭川・竹中・猿橋・高橋である。名和さんは前に登ったということもあり白馬村で留守番をしてもらっていた。

帰りも渋滞があり、白馬村でバーベキューを開始したのは8時過ぎであった。前日、猿橋さんが白樺の木に電灯をいくつか取り付けてあったので楽しく夏の夜を過ごすことが出来た。

### (九) 中国十名山

日本百名山が終わったら何をするかについては以前から考えていた。二百名山・三百名山を全山登頂しようという考えは始めからなかった。もちろん二百名山や三百名山のなかに登りたい山があれば、その都度登ることになる山も出てくるかもしれない。

仕事の関係でサウジアラビア・リビア・イラク・パキスタン・ネパールに比較的長く滞在したことがあった。先にも記したようにヘーゲル・トーマスマン・フロイト・ユング等の関連で歴史を深く遡る性向ができてしまった。しかも創世記や世界の四大文明等は、我が日本とはあまり関係のない遠くの出来事

のような印象をもっていた。日本の歴史は三千年・四千年以上古いものはないのだという考えが脳裏を支配していた。非常に残念だし虚しい思いを持っていた。

しかし中東やその周辺に滞在して現地の人と接したり関連の資料を読んだりしている内に日本との関連の深さを感じて来た。シュメール人・カルデア人・フェニキア人・アラブ人・ユダヤ人等、この地域の人たちが、インド經由海のルートから日本に渡来したであろうことは多くの人が述べている。ヒマラヤの北方シルクロード方面から何世代もかけて渡来して来た人たちもあつたであろう。

そういう背景の中で本を読んでいるうちに司馬遷の「史記」の中で秦の始皇帝が中国を統一後、自分が支配者であることをアッピールしようとしたのだと思われるが、各地を巡遊し泰山や九疑山・会稽山等で諸侯を集めて祭祀を行っていることを知った。数えてみたら丁度十座あつた。始皇は周知の如く法律を重要視し、軍用道路を整備するなど古代オリエントやペルシャの影響を受けている。

この始皇帝が巡遊した十座の山に登ってみようというのが私の次の目標となった。そのため二〇〇〇年一〇月から中国人について毎週一度中国語を勉強している。この登山を通して古代の中東・中国・日本の関連に思いを



寄せたり、新たに知ることが出来る関係や事実を楽しみにしている。新世紀から始めたいので来る一月下旬に先ず泰山に登る予定にしている。この登山は五年内で完了したいと思っている。

## 中国の名山 黄山の旅

長澤 道彦 (昭39)

去年の3月に36年間勤めた会社を辞め、さてこれから何の仕事をしようか、また山にも登りたいがどこに行こうかと考えていたが、なるべく過去の延長線上にない事しようと思った。従って仕事は長い間石油化学会社にいたので出来るだけそれとは違う分野が魅力的に見えたので、IT技術に関連した事をしようと思い、中国の無錫でシステム開発をする会社に参画する事とした。

また登山については日本の百名山に登るのもみんながやっている事であり月並みで気が進まないし、かといって困難な山や高い山にチャレンジするのも、とても今更不可能で

あるので、好きな中国の歴史に出てくる山に登ろうと考え付いた。

山を選ぶ基準は高さや、困難さや、珍しさではなく、いかに長い間人間の歴史に登場し天と地を結ぶ接点になってきたかという時代錯誤の基準に統一した。何しろ中国の山登りの歴史はたとえば中岳といわれている嵩山について言えば四千年前の夏王朝の聖なる山であり、泰山は三千年前の殷、周時代の山であり、その頃から山に立派な道を作り登っていたわけであり、せいぜい二百年ぐらいの歴史しか持たない近代登山とは比較にならない長さである。それ以来中国の老朋友たちにどんな山が良いのかと聞いたり、歴史の本に出てくる山を比較したりして独断で下記の十名山(補欠をいれると十五名山)に決めた。

泰山 (東岳)	山東省	1545米	世界遺産
嵩山 (中岳)	河南省	1512米	
華山 (西岳)	陝西省	2154米	
衡山 (南岳)	湖南省	1290米	
恒山 (北岳)	山西省	2017米	

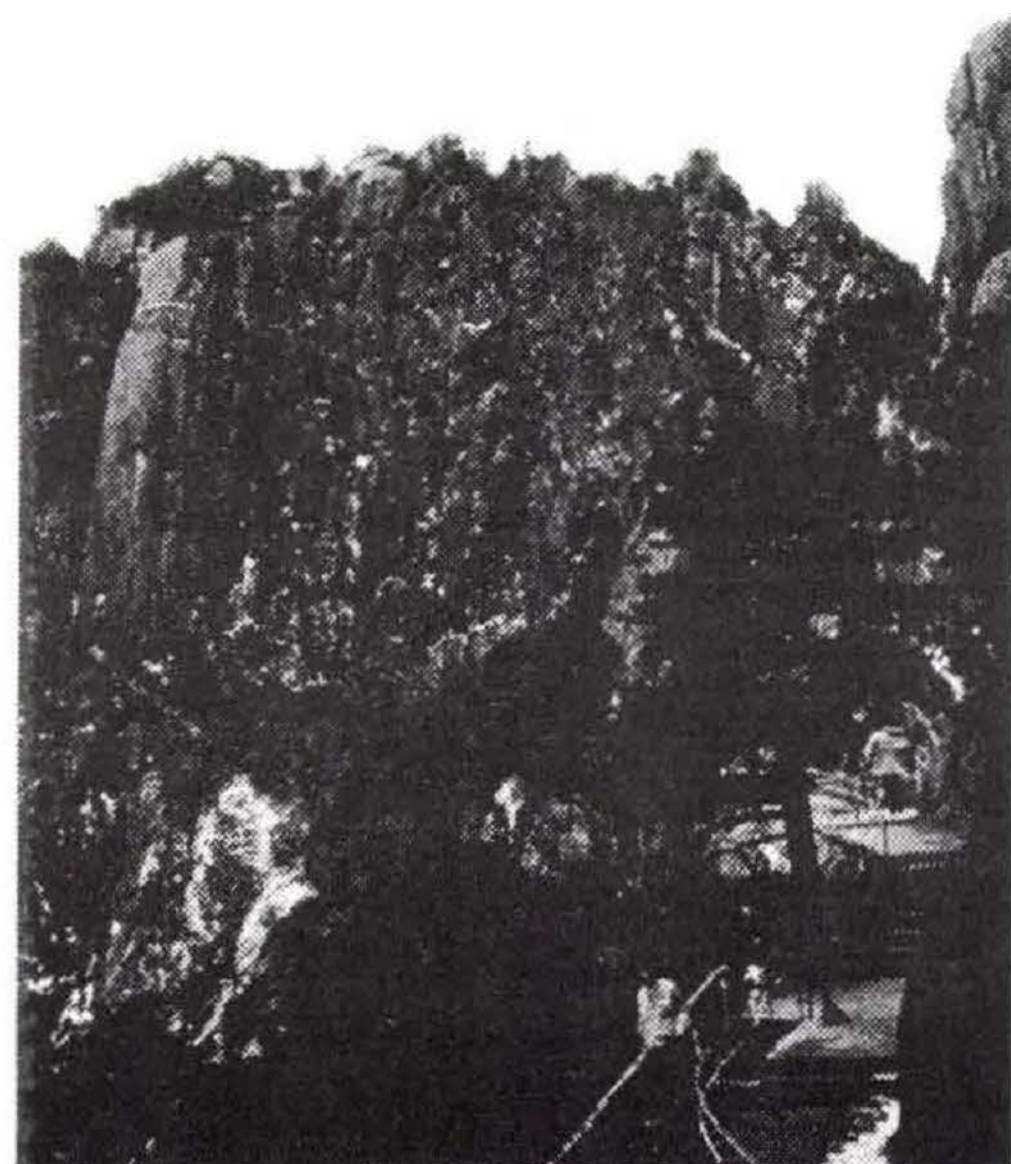
以上の五つまでは二千年以上前から現在までその高さではなく、姿、形や歴史との係わり合いにおいて中国人にとっては一致した名山として認められている。位置的にも中華文化発祥の地を取り巻いているし四山を結ぶ平

行四辺形の中がいわゆる中華であり、中岳は中心にある。

残りの五山についてはやや異論もあるが何人かの中国人と話した結果、五山の外側でありその次に歴史の古い山に決めた。

黄山	安徽省	1860米	世界遺産
峨眉山	四川省	3100米	世界遺産
武夷山	福建省	650米	世界遺産
武当山	湖北省	2500米	世界遺産
芦山	江西省	1475米	世界遺産

補欠として(この五山については今後変更することもあるが)台湾の玉山(3945米)、海南島の五指山(1867米)、山西の五台山(3058米)、安徽の九華山(1341米)、雲南の鷄足山(3220米)の五山を追加し、二年以内に十山、三年で十五山に登



る事を目標とし、地図、案内書、歴史書等の収集と読書を始めた。

そこで早速、今後仕事をやる無錫に一番近い黄山に最初に行こうと決めて、計画がスタートした。

○

黄山は古来「黄山四絶」といって奇松、怪石、雲海、温泉で有名な場所で、多くの詩人や政治家が登っている。自然の山そのものが世界遺産に指定されている珍しい場所である。ただ独りで行くには寂しいので、同じく去年会社を退職しこれから何をしようかと考えていた三森氏に話したところ、黄山のような観光地の山登りには興味はないが（彼はいまだにアルプスの冬山に登るようなバリバリの現役登山家です）、無錫のITの仕事には興味があるという事で、すぐに話がまとまった。

早速、上海、無錫から黄山登山のスケジュールを作り、どうせなら頂上まで人が連なるシーズンを避けて、もっともすいているオフの12月中旬に出発する事となった。

12月12日に上海に入り毎年変わりつつあるこの町の活力に改めてびっくりした。50、60階のビルがどんどん増えてみんな金儲けに夢中になって働いているのは二〇年前の日本のようでもて好感もてる。

12月14日。無錫に車で行き今度事業に参画

する事になったITの開発会社に立ち寄り仕事の打ち合わせを行った。かつては太湖のほとりの田舎町であったが、今では東京の事務所とリアルタイムに打ち合わせが出来、仕事の環境も何ら遜色なく整えられるのであるからITというのは革命である事が実感できる。若い中国人のエンジニアも好感がもて、必ず仕事もうまく行くだろうと三森氏と意見の一致を見た。

15日に太湖を見学し鹿頂山に登った後、最初は車で黄山までの移動を考えていたが8時間くらいかかることなので上海空港までタクシーで戻り、飛行機で黄山空港まで行く事になった。結局2時間ほど飛行機が遅れたので、空港についたのは午後9時頃で車で2時間ほど真つ暗闇を飛ばし、大きな黄山大門をくぐり温泉のある桃源ホテルに11時近くについた。

○

12月16日

朝、付近の温泉街を散歩した。桃花溪のほとりにある街で大きな岩石や山を見るための見晴台が多く建っている。ここの温泉は伝説によれば四千年以上前、中国最初の黄帝が発見したといわれているが、少なくとも千五百年前の唐代には温泉として有名になっていた。由緒ある重炭酸の温泉で、立派なプールもある

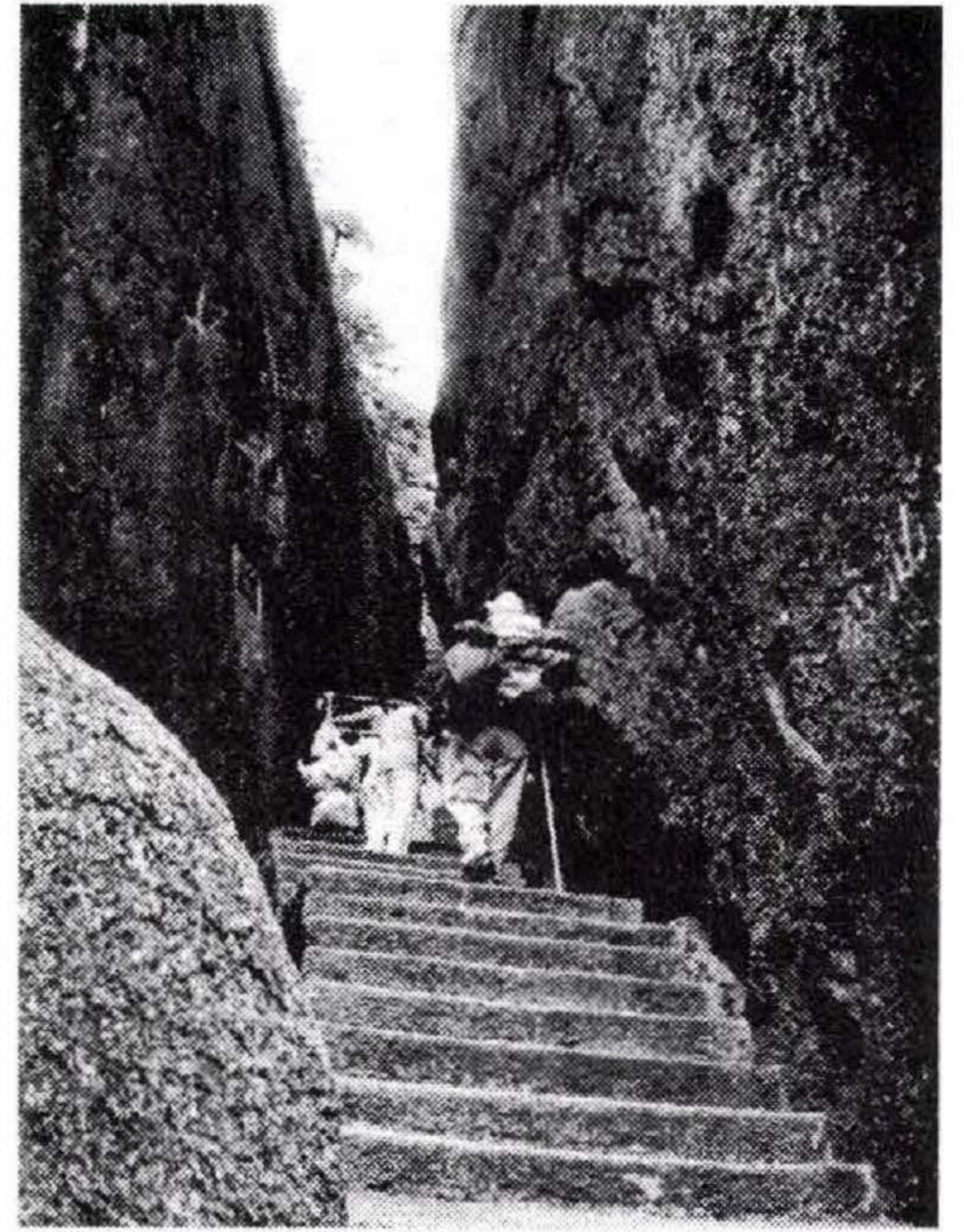
る古い施設であった。温泉の噴き出し口には天下名泉、蒸雲、不浴心不清等の字が岩に刻まれていた。

三つ星級のホテルや宿泊施設も多くあったが12月なのでほとんど人影がなかった。帽子、地図、杖等、登山に必要な品物をそろえて温泉はずれからいよいよ登りとなり山に入る。右側に人字瀑という大きな滝があるが水がほとんどなかった。

ここから石段が延々と連なってあがつていく。しばらく歩くと慈光閣というケーブルルの終点があり入山料を支払う。荷物を運んでくれる人や駕籠かきが沢山いて大変な勧誘である。特に駕籠かきはその後、山のあちこちについて日本人と見ると「会長、会長」といって駕籠に乗ることを勧めてくるので一度は乗りたかったが、三森氏の手前みんな断った。

ここからはただ石段を黙々とあがつて月牙亭、立馬橋まで来ると右も左も天にそびえる岩の峰が現れ、まことに壮観であった。さらに1時間ほど石段を上がると半山寺に着き、右手に天都峰の岩峰が屹立している。岩登りをする人はいそうにないが素晴らしいスラブの五〇〇メートルはあろうかという岩壁である。

ここから上は右も左も後ろも岩と松ばかりで、小心坂、一心天、蓬莱三島と名前が



ついた見所がつづき石段をどんどん上がっていく。樹齢千年の一〇メートルはありそうな松が岩の間にあり歎客松、送客松等の名前がついている。獅子石、象石とか名前をつけられた奇妙な岩との取り合わせが美しい。

玉堀楼ホテルに着くと、雲の上に出て尾根歩きとなる。こんな所に立派なホテルがある。玉堀峰の上には五〇メートルもありそうな巨大な岩があり、奇松怪石とかさまざまな四字熟語が刻まれている。蒲団松、百歩雲梯を過ぎると右が最高峰の蓮花峰（1860米）左が蓮芯峰である。

登っていくと魚の背中に石段がつけられたような絶景の路で、雲の上の断崖絶壁の間に延々とつづいている。亀岩、老僧入定を過ぎると天海となり、山の中心で穏やかな場所となる。ここにも白雲ホテルという立派な国際

ホテルがある。

黄山は、天海、東海、南海、西海、北海に分かれているが、山の下にいつも雲がありピークだけが上に出ているので海という呼称がぴったりである。そこから少し登ると光明頂（1841米）で、眺めが素晴らしくいわゆる黄山三十六峰が雲の上に浮いているのが見える。下ると北海ホテルはすぐである。これがまた巨大なホテルで、鄧小平も泊まったらしくて、やたらとみんなでしつかり金ももうけましようと思語が書いてあるのには感心した。

#### 12月17日

朝早く起きて付近を散策するが天気が悪くガスが立ち込めている。獅子峰、猿子観海、曙光亭に行くが風の具合で一瞬見える事があるが、すぐ霧の中である。韓国や日本やアメリカのカメラマンがシャッターチャンスを狙って大勢夜明けから陣取っている。

朝食後、北のほうに山を降りて見ようと石段を歩き始めたが、これが大変な苦行であった。鶏公峰、青蛙峰等の間の溪谷を松谷庵まで降りたが行けども行けども石段で、上がってくるのは一〇〇キロ近くありそうな建築材を天秤棒で運んでくるポツカだけであった。さすがに万里の長城を人海戦術で作った国だけあって、山の上のホテル建設も人力で資材

を上げてしまう。我々は3時間以上の階段下りで、松谷庵に着いたところで膝が参ってしまい、その先の翡翠池や山に行く元気がなくなりケーブルで上にもどることになった。

ケーブルからの岩峰の眺めはまことに素晴らしい。丹霞峰から西海を散策していたら相変わらずの霧の中に飛来石、仙人晒靴など、立派な岩があちこちにあつたが、天気が悪かつたのと足の痛さで途中のホテルにしけこみ長城と王朝という中国ワインをしこたま飲み沈没してしまった。

#### 12月18日

北海ホテルを出て始信峰に登る。十八羅漢、朝南海、上升峰、道人峰など、東北方面の峰々が屹立している。足元を見ると垂直の岩壁がはるか下までつづき震える感じであるが、雲が下にあつという間に現れて海の上に浮かんだようになる。黒虎松、麒麟松等ここにも名前つきの多くの松と岩があり、見飽きる事もなく白鷺峰の下のケーブルの終点に着いた。

ここから見るとまた数千段の石段が続いているので、昨日痛めた膝がまた痛くなり、文明の利器を利用する事にした。左右の岩峰を見納めに見ているうちにすぐ雲谷寺に着いた。お寺はすでに廃寺となり何も残っていない。そこからタクシーに乗り屯溪の町に戻り明、清時代の古い町（老街）を見て、さらに最近

世界遺産に登録(2000年11月)されたばかりの古い村落をたずねた。

牌坊と呼ばれる家族別の古い大きな門が村の外に林立しており、村の中には古い民家がある。そのまま残って生活をしている。ここは黄山とは別に安徽の古村落ということで世界遺産になっている。まったく昔から変わらない田

## 懇親山行報告

日時 二〇〇〇年一〇月二八・二九日

参加者 山崎弘、丸山則二、倉知敬、三森茂充、俵昭、西牟田伸一、松尾信孝、加藤博行、佐藤活朗、近藤泰、稲毛尚之、特別参加II中島昭子夫人

### 〔懇親会〕

故山田亮三さんゆかりの大町エコノミストクラブハウスに参集し、付近の有明山や爺ヶ岳などに登ろうというのが、今回の懇親山行の趣意であり、特に故中島寛さんが最後に登った山・有明山を、丁度その三回忌にあたるこの一〇月に登って故人を偲ぼう、という意向で企画された。

二八日午後五時、折悪しく雨模様の中を各々クラブハウスに集合、中島夫人も近く

舎の農村という風情であり、子供やお婆さんがいつもどおり生活している、最近の経済発展とは無縁の五百年前そのままの姿であった。もっと多くの村に行きたかったが時間がなく、せっかく友達になった村人と再会を約して飛行場まで行き、またまた遅れた飛行機で上海に帰った。

の別荘より参加された。クラブハウスの予約には奥様のお世話になるなど、いろいろお手をわずらわせることになってしまった。

夕食のあと、クラブハウスの真ん中にある、山田さんの趣向で据え付けたという大きな囲炉裏を囲んで歓談。エコノミスト村をめぐる昔からの様々な思い出やら、まだ記憶も鮮明な中島さんの数々の凄かった活躍、針葉樹会の有り様は如何にあるべきか、などといった話がつきなかった。夜も更けるにつれ、そとでは雨が激しさを増すばかりで、明日の山行は絶望的と思われたが、ともあれ予定の行動プランとしては、有明山試登の組、大谷原の故中村慎一郎君の碑訪問の組、青木湖付近の故萬濃君の碑訪問の組、の三組に分かれることになって、一同寝についた。

### 〔有明山探訪〕

二九日の朝、雨は小降りとなったが、止む気配もない。今回の最年長、山崎さんは、この雨ではどうも、と早々に帰宅されるというので氣勢を削がれる感あったが、行けるところまで行ってみることにして、丸山、三森、倉知の三人は有明山に向かう。松川登山口の入口まで、奥様に案内していただき、車道につきる荒れ果てた感のある橋のところから歩き出す。中島さんの遺稿には、「しばらくは、気持ちのいい沢沿いの道を行く」とあるが、最近の集中豪雨のせいか、そんな気配はみじくもなく、あたりは倒木散乱して、昔は信仰登山の表道だった面影もない。やたらにある赤テープの道標だよりに進むも、登山道でないらしく、引き返して今度は沢の中を登る。沢は思ったより小さく、すぐに急なゴルジュ状となり、最早結構な沢登りだ。雲は重く垂れ込めているし、とても雨をおして頂上まで頑張る気概もなし、楽しく登れる雰囲気でもない。ひとり登り切った中島さんには顔向けできないのではあるが、1時間ほど歩いたところで引き返すことにした。いず

れまた登りに来るつもりであるも、こう道が荒れていては、登るなら裏側の中房温泉からの道の方が増しであろう。

帰途、余った時間を利用して、新しくできた安曇野アートラインなる道をたどって、道沿いにある安曇野山岳美術館を訪ね、更にウエストーン博物館を見学しようと探したが、こちらの方は今年閉館したと知らされ、古ぼけた建物だけを拝んでおしまいとした。

(以上、倉知 敬・記)

### 〔中村慎一郎君レリーフ訪問〕

10/28、29両日に行われた懇親山行につき、その一部を報告致します。

29日の朝は雨の音とともに目が覚めた。朝食を終え、一足先に帰った山崎、佐藤(活)両氏の他のみんなが中島邸に集まったのは9時頃であった。有明山組は初老派(丸山、倉知、三森)、中年派(加藤(博)、近藤、稲毛)に分かれ、いろいろ検討していたが、中島さん最後の登山のあとを辿ろうとこだわっていたのはやはり初老派。中年派は登山口まで行って、あとはホワイトセールに逝った萬濃

君のレリーフを訪ねようと最初からギブアップ。

10時頃、奥さんに案内されて彼らが出ていったあと、私は中島邸に残り俵、松尾両氏の到着を待った。10時40分頃彼らが到着。松尾はこの朝9時10分茅野駅着の「あずさ」で来た俵さんをピックアップ、しかも途中扇沢方面に行くピナスラインに入り込んで引き返したというから大町も近くなったものである。

程なく奥様が帰って来られ、松尾のシャリオで大谷原に出発。途中エコノミスト村入口近くのをそばやで腹ごしらえをし、30分ほどで大谷原着。ちょうど紅葉真っ盛りでそば降る雨もなかなかよいものであった。中村君のレリーフは6、7年ほど前、私が一人で訪ねようとして、俵さんに事前に教えてもらったにもかかわらず、たどり着けなかった難しいところにある。

ここで行き方を解説しておこう。大谷原の大冷沢を渡る橋の前まで車で行く。橋を渡って対岸に渡れば左は赤岩尾根方面、右の車止めを乗り越えて若干下る。道なりに左の樹林帯を行けば5分ほどでまた橋に出会う。橋を渡って対岸にはまっすぐ大ゴ沢沿いの道があるが、左に大川沢沿いの小道をとる。2分ほどで営林署の小屋の前を通り、更に細

くなった道に行く。

営林署から5分ほど行けばそれまで遠ざかっていた大川沢が急に眼前に現れる。ここで少し(5メートルほど)あと戻って、左側のやぶのすきまに押し入るのに適当な破れ目を探し、突っ込む。道から20〜30mほど沢側に下ったところにレリーフがはめ込まれた岩がある。岩のそばの目印としては根元から幹が5、6本に分かれたモミの木、道からの目印としては歩いていて左側に、植えてから10年ほど経った針葉樹の若木の群がある。

レリーフから中島邸に戻って、後処理(水道周りの水抜き、ガス抜き等の冬対策)を行い、松尾号に俵さん、奥さんの車に私がのつて蓼科高原のアドージョに向けて出発。アドージョでは笑顔が素敵な奥様とクウちゃん(犬)の歓迎を受け、一通り見て回ってコーヒーなどご馳走になった。5時頃アドージョを出発し、私は中島夫人の車で荻窪まで、俵さんは松尾号で茅野の駅まで送ってもらいました。

33年前を思い出す感傷の旅と、思い切った全く新しいライフスタイルに踏み出した旧友との出会い、素晴らしい一日でした。

(西牟田伸一・記)

## 懇親山行を考える

こうしてこの度は、山にも登らず終わってしまった。参加者も世代がかたより、限られたメンバーだった。聞くところでは、有明山は険しすぎる、と敬遠されたのだという。日どりの決め方も、やや直前すぎて問題だったようだ。

一方、普通の山行だったら、悪天はわかりきっていたから、直前で中止か延期していただろう。遭難とか人の死にからむのは、楽しめるべき懇親山行には向かないのかもしれない。だが、そんなことより、最早針葉樹会では、山に登ろうという気持ちは無縁のものと、わりきった方が素直なのか。

思い返すと、老若会員入り交じって大勢楽しく登った懇親山行もあり、例えばその昔の五月の遠見尾根、やや最近のものでは九月に徳沢でキャンプした例など、思い出深いものは数々ある。そういういわば成功した懇親山行の、不可欠の要素の一つは学生や若手会員が大勢参加して献身的協力してくれたことだろう。十分な勧誘連絡とか、天気にくぐまれるといった付帯的条件もあるが、何といつても行事遂行にはかなりのサービス提供が必

要なのである。

残念ながら今やそれは期待できる状況ではなく、従来の懇親山行の基盤は失われた。もちろん山に登りたい者が只集まっていけばいいのであるが、その精神だけでは、趣向・立場の異なる会員からなる会の行事としてうまくいくわけがない。

針葉樹会の主要活動は、①年二回の集会、②会報発行、③懇親山行、につきる。

①は、今や登山もしていないので出にくい、世代の幅が広がり顔も知らない者ばかり、なごから敷居が高くて出る気もないという人がほとんど、というのが実態であろうかと思われる、今までいわば求心力となっていた創立時代の先輩なきあと、何か特に若手会員をひきつける魅力を模索するべき時であろう。

②のほうは、会員消息をテーマに年三回の発行が定着しつつあり、執筆者の層も広がって、針葉樹の存在を少なくとも支えているのではないか。

さて、③となると、上述のごとく今や存亡が問われるのであり、期待する側の不満、支える側の不在は、もう解決しがたい。山行幹事の趣味を押し付けるだけの企画に、一々全会員にハガキを出すのも無駄というものである。それではどうするか？

懇親山行という行事に代えて、懇親小集会

ともいうべき集まりを定期的に催してはどうだろう。例えば毎月決まった日に、如水会館14階の食堂（予約なしで不定数の者が集まれる）に集合し雑談する、通知などなし、幹事だけは毎回世代の異なる特定の人を決めておき、その幹事は親しい会員を勧誘などする、お互い近況や昔話など交わし、気が向けば山行も計画する。同期会には皆けっこう顔を出すではないか。その他誰が出てもいい。

評議員会というものがあり、会の運営を議論することになっているが、今や大した議事もなく、機能しているとは思えず、運営なら会長、副会長、幹事数名で充分やっていける。そこで、評議員はこの懇親小集会の幹事に代わることにしてはどうでしょう？ 一年に一度、この小集会に必ず出ていただき、交代で懇親の労をとっていたのが役目である。

そういうわけで、折りから二一世紀となる来年度から、針葉樹会も少しは実態に合わせて変身してみるのはいかがかと思うのです。

（倉知 敬・記）

## 『深い浸食の谷』

—ヒマラヤの東・地図の空白部に行く』

中村保著／山と溪谷社。

2000年11月刊、A5判382ページ

山本 健一郎（昭32）

先年、中村君の著書『ヒマラヤの東』を読んだ時に、その濃い中身に驚いたのは私だけではあるまい。それに外国人が入れるところは、ほとんど隈なく歩いていて、これは中村君畢生の労作、もうこれ以上の本は出ないだろうと思った。

ところが今『深い浸食の谷』を手にして、私は中村君のエネルギーを過小評価していた不明を恥じるばかりである。

それに今度の本の方が、旅行者というより登山者の視点で移り変わる風景を眺めている様で、より中村色が濃厚で引き込まれてしまう。

11章からなる内容はいずれも面白く、会員諸兄にぜひ読んで頂きたいが、私としては今

からちようど百年前にチベットを目指し消息を絶った、知られざる探検家能海寛の最後の地を探し当てる第6章、横山皖一さんも同行された旧川蔵公路の馬の旅など興味深く読ませて頂いた。

それに中村君は写真の腕も上がった様で、なかなか見応えのある写真が読者を楽しませてくれるだろう。この写真を見てみると私の手に負えそうな未踏峰もある。この前中村君が推進してくれたカカポラジは、本当に情けないことに腰砕けになってしまったが、今度は山岳部の創立80周年でも記念して、皆で中村君が見つけた山に登りに行きたいものである。

中村君が言うには、何時か収集した資料をもとにこの地区の探検史もまとめてみたいそうだ。何時までも今の元気を失わず、ぜひ探検史もまとめてほしいものである。

## 『追悼中島寛・天地ある限り』

平尾光司、水藤真樹太、他の刊行委員会編  
中島寛追悼集刊行委員会・発行

A5版340ページ、

2000年10月刊（非売品）

倉知 敬（昭38）

中島さんが亡くなられてから、遺稿集『一期一会の山、人、本』と、追悼集「針葉樹会報88号・中島寛氏追悼特集」が刊行されているが、山を巡る活動を対象にしたその二冊とは異なって、本書は主に仕事や社会的交流を通じて親しく交わった人々、八〇人余りの寄稿による追悼集である。執筆者は主に種瀬ゼミヤ、自治会、Gクラスの大学同期生、長銀や日立金属、宝幸水産の職場で共に働いた仲間、経済開発ほかの調査研究の過程で交流したエコノミストたち、それに外国の友人（英文寄稿）や、異色のところでは銀座和食店のママも、ご家族も加わり、まことに多彩な顔触れからなっている。

本書の構成は、第一部・やみがたきおもい、第二部・追憶のコラージュ、の二部に分かれ、前者には寄稿者の追悼記、後者には中島さんが各種媒体に発表した随筆などが収容されている。第一部が圧倒的に主要な部分を占め、多様な活躍の各局面で触れ合った人たちが、ほとんど異口同音にその交流で感じた強い印象を、様々に物語っている。その感動の表現はいろいろだが、常につきまとうことは、何ごとにも如何にエネルギーギッシュであったかということと、いつのまにか強烈な中島流ともいべき彼の行き方に巻き込まれていくという不思議な体験、といったらいいのではないか。

巻頭に載せられている、竹内宏氏「大きな笑顔」を読むと、長銀の調査部に入った経緯やその後の活躍ぶりが、いつもの同氏のわかりやすい経済談義と同じように、よくわかって納得するのであるが、その末尾ちかくにこう書かれている。

「彼はスケールの大きな考え方に立って、ゆつくりと論すように話し、話し終わる頃には大きな顔全体が笑顔に変わる。彼に会うと、悩み事がすっかり消えてしまうのである」。これはまことに中島さんの本質を象徴的に表現していると思われる。

大学同期生の方々が何人か書かれている中

で、宮崎省吾氏が「やっぱり中島は山だった」と題した文を寄せられているが、登山を通じて知り合った者の立場からは、非常に興味深い。山と思想とか、会社生活とのつながりについて、どう考えていたのだろうかという疑問を呈しておられるのだが、登山仲間でない人もわからないというのは驚きだった。

山の中でさんざん難解な話を聞かされた身にすれば、本書では彼の思想はこうだったという明解な答が出てくるのだろうかと期待していたのである。しかし本稿の趣旨は、会社役員は誰でもできるが登山の方は体力、素質とに限られた者にしかない天性を要するものであり、そういう中島さんがとことん山に打ち込める社会でなかったことは、彼にとつて残念なことだった、というのである。「必要に応じてとる」ことの出来なかった中島さんは、山でも社会運動でも自己完結し得なかったのだろうか。

もうひとり、同期生の水藤真樹太氏は、「秋の光、やがて暮れた」の中で、魂に触れたともいべき追悼を述べられているが、最後に、遺稿集で引用した詩の「丁度よい」は自嘲ともとれる、「丁度よい」徳と共にある人生ではあるが、と指摘される。ご本人は悟るところがあったのかも知れないが、確かに、丁度はよくないと、知る人ぞ知るのだ。また、山

に関わる挿話として、エベレスト撤退のあと、飲みながら大声で泣いた話に触れているくらいではドキリとさせられ、山の仲間とはそうしない、込めた悔しさが強く迫ってくる。

そのほか、寄稿者には、日立金属の職場の方々、長銀では調査部やアルジェリア、アメリカやブラジル、人生の様々な局面で一緒にいた人々が揃い、読んでいけば中島さんの幅広い足跡が浮かび上がるように展開されるのである。当初は、大学同期生だけの内輪の文集のつもりが、自然に広がって大冊になった、と編集後記にあるが、みな不思議な体験をしたせいでそうなったのだろうか。『一期一会：』を読んだら、これも読まなくてはなりません。すまい。

〔注〕 刊行委員会に若干残部あり、5000円で頒布しています。ご希望の方は倉知宛ご一報ください。



『エリック・シプトン』山岳探検家・  
波瀾の生涯』

P・ステイール著・倉知敬訳／山と溪谷社。  
2000年7月刊、A5判389ページ

佐藤 之敏（昭41）

本書は、一九三〇年代から六〇年代にわたって、エベレスト・カラコルム・パタゴニアなどで活躍した英国の登山探検家シプトンの伝記である。

私は滅多に山の本を読む訳ではないが、シプトンの人間としての生き方を描いたこの本を読んでみて、大いに共感を覚えるとともに、その生き方に感激した。シプトンの登山観の純粋性だけでなく、一九五三年エベレスト遠征に関する彼の悲劇性、特に世俗的な名誉心とかいうものには超然としてる（あるいは、いたい）という崇高な人格、とはいってもシプトンも人の子、やはり自尊心を傷つけられ“聞討ち”をかけられるようにして隊長から引きずり降ろされた悔しさや傷心が隠しよう

もなく吐露されているところなどは、身にしてみても共感を覚えるのである。

こうした、人間の心の業のようなものは、だれしも自身のなかに色々な形でできてしまっているのではないかと思う。私の場合は、いみじくもエベレスト遠征に関わって、日本山岳会隊の偵察行に加わった後、本隊には参加するには至らなかったが、登頂の榮譽を目指すチャンスを得られなかったことにはなく、大変フェアでないやり方に対するいきどおりが、かなり長く残ることになった。専横的な幹部に対する反吐が出る程の嫌悪感と、（まだ若かった私の）自尊心が深く傷つけられたことが、あれきりバツタリ山を止めてしまったことの心理的背景になっている。勿論、エベレストのせいで山登りがいやになるというのは、理屈に合わないことではあるが、しかし、あのシプトンですら、エベレストの失意から立ち直るのに数年かかっているのだ。私の場合は、ヨーロッパで徒手空拳の生活を始め、それが精神的冒険として心の空間を埋めていたという面があったのだろう。

そういう気持ちの重なりもあって、シプトンの生き方には共感を呼ぶものがあるのだが、また一方、「訳者あとがき」で触れられているシプトンの探検の本質的価値についても、強い同感を覚える。あとがきでは、マイケル・

ウォードの偏狭なシプトン観に対して、訳者の反論として探検本質論をぶつけているのだが、まさに共感するところである。それは、私が一九六九年エベレストの帰途、ナムチエ・バザールで偶然出会ったときの、シプトン本人の好感の持てる面影とダブって、何とも胸にぐつと来るものがある。

本書の冒頭には、サミュエル・ジョンソンの伝記作家の引用文が記載されており、「素晴らしい人間であっても、その全てに完璧であった訳ではない人生を描く」とあるが、その言葉が意味するものを、前述のウォードの如く突き放すような刺をもつてでなく、一人の人間の多面性を温かく見つめながら表現するのは、容易なことではない。そしてまた、ただ「褒めちぎる」だけでもなく、いわば実物大の人間像が描かれているだけに、この本には感動させられるのかと思うのである。

「山でいえば、それを征服するとか、極限の技術的困難に挑戦するという方向にはつきつめていかない、人に対しては、競争する心とかあ責める気持ちを持たない、というか欠落しているとすら思える」（訳者あとがき）、シプトンが遺した「満足する人生を送ることが、最も大切なことだ」という至言には考えさせられるところがある。最後に、訳の良さに加えて「訳者あとがき」の素晴らしさによつ

ても本書の価値が増していることを付け加えておこう。

## シプトンの評伝にまつわる思い出

藤本 敏行（昭51）

倉知さんが翻訳されたシプトンの評伝『エリックシプトン——山岳探検家・波瀾の生涯』が山と溪谷社から発行されたので早速読んでみた。著者はピーター・スタイル。アメリカ在住の外科医である著者は、シプトンがエベレストの隊長の座をハントに譲りパタゴニアで復活するまでのひととき校長を務めたレイク・ディストリクトにある登山専門学校に生徒として入学したことを契機として、その後、晩年に至るまでのシプトンと親交を深め、自身71年のエベレスト国際隊に医師として参加したこともあるという経歴の持ち主である。

シプトンの登山・探検家としての業績は『未踏の山河』（大賀・倉知訳 茗溪堂 1972年）に詳しいが、本書はそのシプトンの生

い立ちから晩年に至るまでを、シプトンの著作をはじめとした公開されている資料に当たるのはもちろんのこと、存命する関係者にインタビューを行い、さらにはシプトンが遠征の折々に友人達と交わした私信を渉猟し、自叙伝には表れることの無かった人間シプトンを描き出すことに努めた評伝となっている。

この種の登山家の人となりまでをも含めた評伝は、近年日本の登山家についても結構書かれてはいるが、その大半は先鋭的な登山に打ち込んだ比較的若い世代の登山家についてのものであり、登山史的な意味でもまた人物論としてもそれほど興味深いものには出会っていない。（例外は本田靖春の『今西錦司』くらいか）ところが本書は対象が他にもないシプトンであり、仮にシプトン個人に思い入れが少ない読者にとっても、その登山・探検歴が類例もないほどにエキサイティングなものであることに加えて、ある時代についての歴史的な読み物としても、大変興味深いものとなっている。

本書については個人的なことながら関連する多少の思い出がある。85、6年頃だったと思うが、当時ロンドンに駐在していた僕の中に、アルパインクラブの会員であるジム・ペランという人物に会って、パタゴニア以降のシプトンが一体何処で何をやっていたのかに

ついて情報収集をして欲しいという倉知さんからの依頼（指令）が舞い込んだことがある。ペランの連絡先はやはり同時期にロンドンに居られた有賀さんがご存知とのことであったので、有賀さんと語らってペランに電話を入れ、趣旨を説明して面会を申し入れた。

ペランは当時40代前半といった年齢で、第一線のロッククライマーとしてまたクライミングについてのエッセイや登山家論を著しており、書くことのできる登山家として彼の地の登山界では名の知れた存在であった。彼にしてみればなにやら日本の登山愛好家がシプトンについて話を聞きたいと行って来たわけだが断る理由もないし、何時でもどうぞと我々の申し入れを快諾してくれた。こちらとしてはネパールやカラコルムでの探検について意見を交わすというほど、ヒマラヤにもシプトンの山岳探検歴にも通じていたわけでもないのに凶々しくも電話一本で面会を申し入れたものだと今でも思うが、早速ペランを訪ねることになった。

冬のある日、有賀さんは都合がつかず同行不可能となったが、イングラッド北部のペランが住む村に向かう列車に乗り込んだ。ロンドンでも珍しく結構な雪が降った日で、目的の駅を降りると大層な積雪で強烈に寒い日であったことを覚えている。

ペランの家で話したことを鮮明に記憶しているわけではないが、晩年のシプトンは数回に亘りパタゴニアを訪れる一方でブータンやガラパゴス等僻遠の地へのツアーに講師として参加をしたりする中、その合間はチエルシーのフラットでもつばら過ごしていたこと、そのフラットの主人は女性の友人であったこと、最後はウィルトシャーにある友人の家でその女性に見守られて生涯を終えたということ、それ以前からシプトンは多くの女性達と度々深い関係になり、女性と縁の深い人生を過ごした人物であったこと等々を、暖炉に当たり紅茶を飲みながらペランが色々話してくれたことは良く覚えている。

その折りシプトンを評して、「彼はフィランドラーである」という文脈で、*philanderer*なる言葉をペランから教わったが、その意味するところは恋に恋するタイプの人間——確かに *a man who loves to be loved* といった表現——であった。

そんなこんなでその時は山や探検についての目新しい情報は入手できず、シプトンの女性遍歴まがいの話を倉知さんにレポートしたのみで終わったわけだが、そのようなシプトンの一面が今回の評伝ではストレートに記述されているが故にことのほか僕には面白い読み物となったわけだった。

シプトンという人の人生については『未踏の山河』に加え『Upon That Mountain』の拾い読み、さらに本書とこれで三度レビューしたことになるが、どうしてこのように波瀾万丈の人生を送ることが出来たのであろうかと思わずにいられない。セイロンに生まれ南アジアと西欧の間を頻繁に行ったり来たりする幼少期を過ごしたこと、生まれたときに既に父は無くあまり社交的ではない、但し旅行好きの母の手で育てられたこと、英国での学生時代にはラテン語の構文に散々苦勞したこと、ウインパーのアンデス紀行に感動し登山に目覚めるきっかけを得たこと、大学進学を断念しケニアに植民する道を選択したこと等々、こうしたことどもの一つひとつが大英帝国という時代背景を抜きにしては考えられず、その後のシプトンの人生を決定付ける重要なファクターになったことは間違いないであろう。このような幼少期からの体験が、ティルマンという10歳も年上の寡黙なパートナーとの最良のペアの形成に繋がり、また多彩な女性遍歴の遠因となっていたのであろうし、軽量小規模な遠征隊についての彼の志向のベースともなっていたのであろう。

エベレストの隊長の座を巡るゴタゴタは登山史的観点からは重要かも知れないが、個人的には付け足し程度の関心しか感じない。登

山史の一断面という以上に、シプトンという希有な存在の歩いた道を知るという意味で、誠に面白く読むことが出来た次第である。

## 会報の活性化のために

田形 祐樹 (平6)

近頃の会報は、内容が充実してきて、おもしろいと思います。

しかし、なんとなく「まとまり」がなく、雑多な感じがします。(それが同窓会報の基本的性格ではありませんが)

そこで、書き手が「書きたいから載せてくれ」という以外は、何かテーマを絞って原稿を集めたらどうでしょうか。

ただ「何でもいから書いて下さい」というのでは、頼まれた方も、書きにくいものです。そこで、たとえば「あなたが好きな山、嫌いな山」とか「私の好きな山の本・映画」等で、原稿を頼んでみるのです。

このように、一つのテーマを世代を超えたOB・OGが共有し、書いて、それを会報に載せることで、芯が通ったものになるのではないのでしょうか。

もちろん、こうした、一つのテーマについてだけでなく、違うテーマで書きたい人には、そのテーマで書いてもらうことを妨げるものではありません。

以上の「提案」は、会報幹事さんだけに知らせればよいのかも知れませんが、OB・OGの方々にも参考になると思います(また幹事さんが、すぐわすれるかもしれないので!)、会報に載せてもらいました。

## 編集後記

▼今号でもお二人の先輩の訃報をお知らせしなければなりません。現会員中、卒業年次が一番先頭の昭和4年卒業の冠木さんが昨年11月17日に亡くなられたとのお手紙がご長男から届き、生前にまとめられたご本が添えられて参りました。そのご本の一部を今号でご紹介させていただきます。また今号取りまとめ最終段階の本年2月20日に昭和19年卒業の松下順吉さんが亡くなられました。両先輩のご冥福をお祈り申し上げます。

▼今号には「懇親山行を考える」と「会報の活性化のために」という二つの提言が寄せられています。前者については特に会長以下、会の幹部の方々にお考えいただきたい、また後者については編集担当として参考にさせていただきます。今後とも建設的提言をお寄せ下さい。(佐藤)

▼百名山といえば、朝日新聞社が週刊百科シリーズで百名山を出したところ、久々のヒットになったそうです。世界の文学シリーズの売れ行きがパツとせず落ち込んでいた編集部も明るい雰囲気になってます。売れた理由は、おそらく山登りしない人もけっこう買ったからでしょう。我々はどうも「なんとか百選」というのが好きらしく、そのせいではないかと思ってます。

▼3月上旬には発行できると思っていました、編集者の都合でお手元に届くのが遅くなり申し訳ありませんでした。次号は6月発行の予定です。連休山行の記事などもなんとか掲載できると思いますので、ふるってご寄稿くださるようお願いいたします。

(井草)